公益の風 #9

東北公益文科大学
学長補佐・准教授
鎌田　剛

地域づくりは「思い」による参加の時代へ

地域の活動といえば、清掃、住民レクリエーション、文化展、季節の祭りなどを思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。近年では、それらの担い手不足が深刻化し、多くの地区で問題になっています。そこで今回は、地域づくりの今日的な目的と、新しい参加の様式（スタイル）を提案したいと思います。

これまでの地域づくりは、主に地区の維持・管理と親睦を目的としていました。活動を絶やさないために役員や当番として担当する慣習のもと、人々は、〝頼まれたから引き受ける〟、〝順番だからしようがない〟のような「責任」（responsibility, turn）の論理に動かされてきました。

責任にもとづく参加では当事者意識（自分ごと感覚）を持つことが難しく、目的意識に動機づけられた活動ができません。〝今までどうやってきたんですか？〟と前任者に尋ねることはあるかもしれませんが、〝これからはこうしたいんです！〟という主体性は生まれにくいものです。

少子化・高齢化が進行し、人口減少が加速するなか、地域の持続可能性を高めるためには、責任を超える新しい参加のスタイルが必要です。それが「思い」による参加です。mission, desire, or hopeあたりの英単語を想起すれば、「思い」が〝自分ごと〟としての参加を導くイメージができるものと思います。

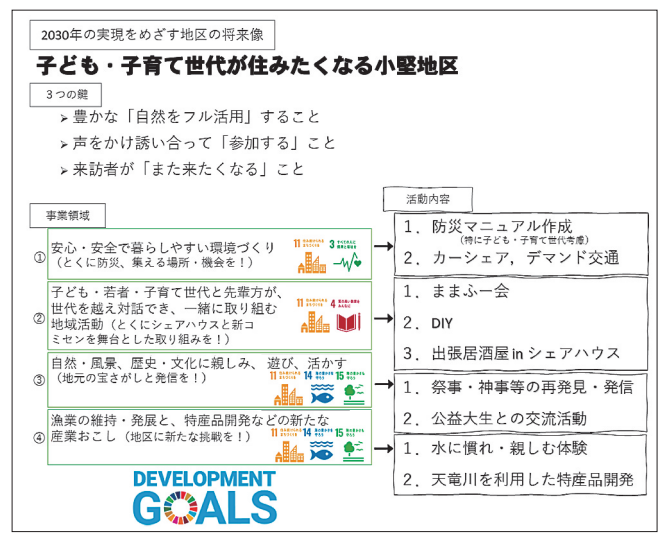
「思い」による参加は地域に連帯と循環を生み、自律的な成熟を推し進めます。たとえば、地域でのSDGs（ローカルSDGs）に取り組む鶴岡市三瀬地区では、環境省の「地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業」に採択され、周辺地区のみならず温海、朝日、遠くは酒田の日向地区などとも連携を模索しながら、自然エネルギーの活用と自然体験の活動に取り組んでいます。また隣の小堅地区では、ソトから来た若者もメンバーに入れた住民ワークショップを積み重ね（14回、ほかアンケート1回）、2030年に向けた行動計画を策定しました。移動支援や食を通じた交流、歴史・文化再発見など9つもの事業を定め、ここで暮らす価値を次代に引き継ぐための第一歩を踏み出しています。両地区には、責任の論理も内部的な境界も超えた未来への「思い」が感じられます。

地域には、役員のなり手は少ないかもしれませんが、「思い」のある人ならたくさんいるはずです。住民だけとも限りません。都会に暮らす地区出身者、ソトからやってくる地区イベントのリピーターなども、「思い」を持つ候補者です。そうしたメンバーをみつけ、参加の機会を用意することが、これからの地域づくりの鍵になります。

前出の小堅地区では、若者中心の「未来創造事業部」を自治振興会に組織しました。メンバーには子育て世代が多く、仕事と家事育児に明け暮れながらも、「思い」で活動をつないでいます。地域ビジョンづくりのワークショップには、横浜と札幌の地区出身者がオンラインで参加しました。地区の移住体験シェアハウスに一年暮らした宮城出身の方は、今は近くに家を借り、もとからの住民よりもむしろ積極的に活動しています。

「思い」の力が作用し始めた小堅では、旧小学校に遊び場をつくるプロジェクトがコロナに負けず進行中です。「思い」は、あらゆるものが縮んでいく時代にあって、自分たちの手で大きく育てることのできる、唯一の〝地域資源〟です。

「未来をつくる」ことを目的とし、「思い」による参加で、地域を動かしていきましょう。



小堅地区の地域ビジョンづくりワークショップの様子と、完成した地域ビジョン「コガタノスガタ2030」の全体像

「敬天愛人」2022年3月号 Vol.156掲載（荘内日報発行）